

浄土

1982-1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（新聞紙類）
昭和五十六年十二月二十五日印刷
第四十八卷



年の始めに――

人はこの世に生をうけ、長じては家庭を営む。とてもかくても、この世が住みよくとも住みずらくとも、そこに生きなければならぬ。そして時がくると静かに消えて行かなばならない。すべてかたちあるものは必ず滅する。仏教の基本的な教えの一つである。しかしこの世に滅びないものがある。人はそれを真理と呼び、永遠の生命と呼ぶ。八〇〇年もの昔、なむあみだぶつと称えれば、



人々は永遠の生命の中に救われる、と説かれた法然上人。そのお身体は滅して再び垣間みることはないが、その教えは滅びることなく、今の世に伝わっている。その時から、どれほど多くの人々がその教えによって心のやすらぎをおぼえ、日々を送り、やすらかに生命を終って行ったことであろうか。この世の生命は尽きても、永遠の大生命の中によみがえって行ったことであろうか。苦しい修行も必要ない。難解な經典に頭を悩ますこともいらぬ。ただ往生極楽のためには、なむあみだぶつと申して疑いなく往生する、と信ずることである。

さて、心は決った。人は目的地のさだかでない旅には前途に不安を感じる。しかし、いかに険しい山や坂がまちうけていようと、目ざすところの定まった旅は心強い。ただひたすらにそこに向って歩めばよいからである。年の始めに、もう一度、来るべき日々をいかに有意義に過すべきかを静かに考えてみたい。

正月号



諸行の中に念仏を選択して、
もって旨歸となす。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.196)

目次

水子地藏に涙を流す日本の婦人……………林 靈 法……(2)
——法然上人ご生誕八五〇年に思う——

法 話

光明と生命の信仰……………土 屋 光 道……(7)

初 雪……………細 田 隆 善……(14)

俳文コーナー

ロンドンの虚子先生句碑再訪の旅……………塩 山 三 九……(21)

命へのめざめ……………安 居 香 山 ……(16)

詩・・・福寿草……………清 川 宗 治……(13)

<読者のページ>

祖母は哀しき菊仏……………松 本 恭 子……(32)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

<表紙のことば> 赤 富 士……………大 西 耕 三……(30)

<表紙裏・巻頭言> 年の始めに——……………佐 藤 良 純

念仏ひじり三国志② ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(35)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

水子地藏に涙を流す日本の婦人

— 法然上人ご生誕八五〇年に思う —



○水子地藏さんがふえて来た

最近、日本の寺に水子地藏さんをおまつりするのが目立って来た。もっともお寺と地藏さんとは昔から深い因縁があるのだから当然のことではあるが、近ごろは地藏さんに赤いよだれかけを首につけた可愛いお姿がよく目につくのである。

私はそうした地藏さんをおまつりになっている寺にき

林 はやし

霊 れい

法 ほう

(大本山百万遍知恩寺法主)

いて見た。どんな事情でおまいりに来られるかというところ、流産の場合もあるが、大抵は妊娠中絶の婦人であると言ふ。昔から日本の母親たちは流産や間引きで失った子供を悲んで、お寺の水子地藏さんに祈り、その子のために涙を流して来た。それは家の事情や公のためにやむないことであつただろう。しかし、最近の日本の繁栄社会では事情が少しくちがって来ている。

日本人の現在の生活程度は、一般的に言つて、まこと

に恵まれている。東南アジアの同じアジアの兄弟にくらべたら、全く雲泥の相違である。しかも、アジアの後進諸国での家族の数は非常に多い。三人四人は少い方で、六人九人というのが普通だろう。それにくらべて、最近の調査では日本の一家族の子供の数は一、四位となっている。ここしばらくは少しづつ更に低下して行くのである。ヨーロッパでも同じ事情で、先進国ほど一家族の子供の数は少い。日本と同じように戦後の優等生である西ドイツでは、この十四、五年間に出生率が五割減となっている。この傾向がつづくと、今後二十年間に西ドイツの人口は、現在の六千万人の半数に落ちて行くことになると言われている。私は子供を産まない国民は、歴史的に見て自国の文化と伝統に死刑を宣告しているものだと思う。

日本の将来を考えていろいろと憂慮される。今日の日本の家庭では、なるべく子供の数を少くするようになつて来ているが、それは経済的な観点から来ているのではない。生活が贅沢となり便利となつて来て、次から次へと商業資本が人間の慾望本能をかきたてる。いわゆる贅沢貧乏のありさまである。そして家庭における主婦も、

いく人もの子供を養育することの苦勞をはぶいて子供一人に親の世話を専注する。それは子供の教育や就職も、この国ではさけようとするからである。そして、一方では親自身もなるべく楽な文化生活をして、ゆとりのある生活を楽しもうとする。

こんな事情から、妊娠中絶も随分と沢山に行われている。外国人が日本には三つの天国があると云う。一つは無宗教者の天国、一つは子供天国、そして一つは墮胎天国だと言われているところから見ると、相当なものである。日本で一九四八年、初めてこの妊娠中絶が許されるようになったときの事情を考えてみるがよい。終戦後の混雑の中で、特に経済生活の一番に苦しい最中で、それも生活上からやむを得ない事情にあっただろう。ところが、今日では日本人の経済生活はその時分とは全くくらべものにならぬほど贅沢になっているのに、日本の婦人は子供が二人三人と生まれるのを拒否しているのである。しかも妊娠中絶を体験した日本の沢山の婦人には、そのことが大きな良心の悩みとなっているのである。

○わが命は賜りたるもの

日本の仏教者はこうした日本の現状に対して、なぜもっと根本的な問題を問いたださぬのであろうか。水子地藏をおまつりいたし、若い母親たちの良心の痛みをやわらげてあげることも結構だが、もっと根本に妊娠中絶という殺人行為に対して、深い自覚を訴えることが大切なはずである。仏教こそ生命の尊さを深い立場から説くものであった。この点については、日本の仏教界も市民団体も、まことにあいまいな消極的な姿勢である。

これにくらべると、キリスト教界、特にカトリックはきびしく態度を明確にしている。「殺すなかれ」という神の掟は、依然として有効である。人間は妊娠のときから生命の不可侵的な権利を有しているはずである。妊娠中絶は新しい個性をもつ人生を殺すことで、それは国家が人間の生命と尊厳を刑法によって保護することを断念したことになるのである。

一体、いまの日本人のわがままな生きざまで、果していつまで日本の繁栄を保持して行くことが出来るだろう。妊娠中絶については、いろいろな理由や事情をつけているにしても、結論的には自分だけのわがまま勝手からのがた多かるう。人間の生命というのがどのよう

に尊いものであるか、それを知るにはわが命は自分でどうのこの出来るものではなくて、実に賜りたる命であるということを知ることである。賜りたる命を自分一個の事情で殺すということは、何としてもそれら恐ろしいことである。

自然科学の教えるところによれば、冷却した原始地球が生まれてより、今日まで実に四十六億年を経過していると言うことである。始め十億年間は、まだこの地球上に生きものの原型となるものは発生せず、水素をもととして化学作用のみ行われていた。やがて十億年後に、偶然の機会に地球上に生命のもととなるものが内発して、それから生物進化の歴史が始まった。そして、三十六億年という長い長い進化の果てに人間という今日の文明人が生まれ出て来た。

そこで、私も人間が今日地球上に繁栄するまでには、実に気の遠くなるような長い歴史を有して来たことにいま一個の人間の生命が生まれ出るには、この長い間、時間的空間的なあらゆるお育ての尊い無量の関係によるものである。仏教ではこのお育ての関係を縁というが、このあたたかい縁が全部全うせられてこそ、初めて

生まれ出ることが出来るのであった。縁起という仏教の根本思想は、この尊い事実をあらわしている。縁りて起る無量の関係が重なり重なり会い、また無尽に結ばれ合うて、いまここに一つの命が起り出ていることなのである。この長い間どこかで一縁欠けたり、結び方がまちがったらいまの人間の生命とはなり得なかった。この実にむづかしいことがいまあらわれた。むづかしとは難しと書く。人間と生まれる、人間として有ることはむづかしい、それを有り難しと書く。この言葉をすなおに読めば、ありがたいなあ、と言うことになる。私が猿や犬に生まれ出ずして、人間に生まれ出たことを、本当の意味でエリートだと思う。更に考うべきことがある。それはこの生物進化の長い過程で、生命の発展には、太陽や水等から更に植物や動物等の、実に他からのさまざまな献身の上にこそ、わが身の養育されて来ていることである。只今の私の命は、いく十億年の長い間、無量の他からの無償の献身の上にこそ、長養されて来たものであったということである。

こうした生命の深奥性を自覚して来るとき、わが命わがものにあらず、実に天地の大生命より賜りたるもので

あると、謙虚と畏敬のこころをもって受けとる姿勢が生まれてくるのである。自分のおなかに宿った一つの生命に對して、親は賜りたる命としてこれを受けとる姿勢が当然に生まれてくるだろう。おなかに宿った生命に對して、困った、などというわがままからこれを処置するなどということは、天地の大罪を犯すことである。わが身がいく十億年のかなたから、尊くもお育てを受けて生まれ出でながら、せっかく自分に賜りたる千載一遇のわが子を殺生して生き残ろうなどと考えるのは、何という勝手な親の生きざまであらう。

○家庭教育の誤りはここから

数年前のことである。西ドイツにおいてドイツ刑法第二一八条をめぐって、妊娠中絶の問題について激しい政治論争が行われた。

この二一八条というのは、未だ生まれていない胎児をも含む人命保護の法律である。言うまでもなく妊娠中絶を否定して生命の保全を約束したものである。ところがこの二一八条の修正法案が出されたが、その推進者は女性であつて、女性自身の体に対する自由を旗印として、

ついに法の修正に成功した。修正に反対したのは主にキリスト者であった。彼らは胎児でも人命と変りはなく、保護されねばならぬという立場であった。この修正案を通過させる運動の中で、ウーマンリブの代表者たちは「腹は私のものだ」という大きなプラカードを掲げて、デモ行進をした。これは実に女性の腹は生命のため、また人類の次の世代を生むためという、大切な使命を忘れて、個人の所有物に墮してしまっただけである。

この事実は日本の場合とて同じことであるだろう。今日の日本教育は、生命の尊重とか、人間の尊厳などと合言葉だけを表面的に言うだけであって、それでもなぜ尊いかについて、哲学的宗教的にほりさげて教育をしてはいない。だから、今日の青少年が自らの命を断つといういたましい自殺の現象が年々ふえているし、一方では暗闇の中で拙角に遠いかなたから望まれて宿った命が、葬られていくという事実になってあらわれている。

日本の母親は、生むもやめるも自分の自由だと考え、自分の子供はすべて自分が生んだ私有物だとしてつきり考えている。ここから、今日の家庭教育のさまざまな悲劇が生まれている。自分がつくるのではないのだ。生まれ

てくる子供は賜りたる命であったのだ。先ずこうした親自身が自分の人生にどのような姿勢で生きるかという、親自身の生きる姿勢の問題がここに問われなくてはならない。

ここで、もう一度言葉をくりかえそう。水子地藏さんの前に涙する前に、えらばれてこの世に生まれ出て来たわが命の尊さをじっと見つめてみることである。そして、子供は何人あってもきつと育って行ける。同じアジアのあの貧しい国々の生活のことを思いおこすことである。とほしきを領ち合うという尊い心が、いまの日本人には欠けてしまっている。

それに日本の仏教者は、水子地藏さんをまつる前に、なぜもつと生まれ出ずる命の尊さを説かぬのであろうか。すんでしまったあとの祭りだけを慰めるだけで、それでよいのだろうか。

今年は法然上人のご誕生八百五十年の記念の年である。一つの生命の誕生が、こんなに世界の人々に尊いお念仏の光を与える結果となったのだ。無数の生命の誕生には、また無量の人類の宝が宿されているはずである。

光明と生命の信仰



つちやこうどう
土屋光道

(浄土宗布教研究所主任
大正大学講師)

「もう幾つ寝るとお正月……」

と、指折り数えて昔の人は新しい年の始まりを待ちわびたものです。それに比べて、最近の人は、それほど新鮮な期待と喜びを持たなくなりました。かくして中には、「お目出とう——って、別にそう目出たい気分にもならん。今年も寝正月だ」と云う人もいるようです。

それでも、たった一日の違いなのに、いよいよ元日もなると、何か気分が変わり、昨日とは異って、天も地

も、野も山もみな一面に春陽の輝くのを覚え、さえずる鳥の声にまで、何かしら、人の心を引き立たしめるものを感じます。

近年、明治神宮をはじめ、各地の神社や仏閣に初詣する人は、大変な数になります。別に明治天皇を神として信仰している訳ではないのだが、何か日常普段の気分と違った清新な気持を求めて行きます。

ずい分と、昔に比べて世の中も変わったが、日本人の心

の底辺はやはり、正月を迎える先祖の心が今も宿っているのです。

さて、一年の最後の日を「大晦日」と言い、全国のお寺で「除夜の鐘」を撞いて、新しい年を迎えることは誰でも知っています。しかし、その意味を知る人が段々と少なくなったようです。毎月の最終日三十日を晦日と云う。

「晦」という字は暗いという意味で、晦日とは、光のない暗い夜の意である。これは、昔は太陰暦で、三十日は月が光を失う闇夜で、月が隠れる「つきごもり」と云うのは、最も光のない一番暗い日ということなのです。

ところで、それは単に、肉眼にうつる外の世界の暗さだけでなく、それは内なる心の世界の暗さであったのです。その内面の闇とは、自分の罪穢であります。

わが国では、古来、この身心の穢、毎日の生活の中にいつもつもった罪を払い浄めるために「禊と祓」を行ってきました。中でも六月と十二月の晦日には「大祓」の儀礼をして邪気を払ったのです。今でも、大晦日に大掃

除をし、長い笹竹で天井の塵を払う習慣があるが、それは、決して物質的な塵やごみだけを払うのではなく、わが身心、わが生活を反省し、そこについた汚濁の罪穢を払い清める大切な意味を象徴しているのです。

ところで、仏教でも、この身・口・意の三業（行為）の罪を厳しく内省しました。人間というものに、貪（むさぼり）・瞋（いかり）・痴（ぐち）の三つを頭とする、沢山の煩惱を発見し、この煩惱の悪しき働きによって人間本来の聖い本性が汚され失われていると考えました。この煩惱こそが、衆生の身心を悩まし、迷界に繋留する獅子身中の敵であり、この無尽の煩惱を断絶することが解脱であり、そこに涅槃寂靜の真実菩提を証得することが理想であります。そして、この煩惱を「無明」、即ち光の無い闇で、この闇を滅尽した光明の世界が悟りの極地なのです。

この闇と光りの仏教思想がさきの日本人の信仰の土壌に受けつがれたのが、大晦日の終り、新春の光りを迎える時に全国のお寺で撞き鳴らされる「除夜の鐘」なので

す。文字通り、夜を除く、すなわち、百八つもの多くの無明煩惱の闇を一つ一つつき除くのであります。

過去に、いつしか積った、わが心身、わが生活の罪障の闇を打ちくだいて、そこに新しい光を仰いで、自己を浄化する、素材ではあるが、深い宗教的な意味をこめられた慣習であります。今日の人は、遠い先祖が味わった深い意味を忘れてしまったのではないでしょうか。

さて、身心を浄めて次に、元旦の初日を拜んだ時、全く新しい気持になり、春の日の若草の芽生えにもまして、新たな望みと喜びと力とが身心に湧いて来るのを覚えます。それは一体どこから来るのでしょうか。

元旦の元は、すべての始元であり、且とは地平線の上に昇った太陽、即ち日の出の姿であります。この天の光が、身を照らし、心を明るくするのであります。

弁栄上人のお歌に、

日に新た日々に新たに改めん

たえぬ光に照らさるる身は

とありますが、日本語の「あらた(新)」とは「あらた(改)

まる」ことと同義語です。過去の暗闇の自分から、新しい光明の自己に改まること、昔の罪障の自己が死んで、新たな神聖な自己に再生すること、この復活こそが、真正の宗教の根本要諦であります。

「正月」というのも、すべてを正しく直す月の意味であり、その正とは、小さき我執の正でなく、天地の心に規準に合わせる大正であります。また、古来、一月を「睦月」と呼ぶのも、互いに仲好く睦まじくする月ということで、これまた、自分に都合のよい人だけと仲好くする和合でなく、差別なく常に天地の一切と和睦してやまぬ神仏の心に融け合う心であります。

さて、お正月を迎えて、すべての人がお互いに、

「お目出とう」

と祝詞をかけ合います。

「結婚式」や「お誕生日」、「喜寿、米寿」にも、「お目出とう」と云いますが、それは祝われる人に向って云うので、祝われる御本人が、相手に「お目出とう」とは決して云いません。すべての人がすべての人お互いに、

「お目出とう」と声を掛け合うのは、お正月だけです。

面と向っては勿論、わざわざ年賀に訪れたり、賀状まで出してなぜ「目出たい」と云うのでしょうか。この目玉が出たら大変なことです。目出たいとは、「芽出たい」が本意です。

旧暦（陰暦）の正月は現在の二月ですから厳しい冬の寒さの中にも、梅の蕾もほころびやがて鶯の初音も聞かれる季節です。長い長い冬、待ちに待った春の訪れ。現代人と違って昔は、衣食住すべてに、冬の辛さは身心にこたえたことでしょう。早く暖かくなればよいと、春の陽光を待ちわびる心は、私たちが想像する以上に強かったに違いありません。それだけに、ほんのちょっとした春の気配をも敏感に見落さず、厳寒にはころびる一輪の梅花にも春の匂いをかぎとって、冷くかじかんだ心がゆるみ、固く凍った大地にチラッとさす緑の芽生えを発見しても、生命の復活に胸ふくらませることでしょう。一年に当然四つの節分があるのですが、四季の分かれ目を節分と云い、冬から春の季節の分け目だけを特に節分と呼び、特別に行事をするのも、この冬の生活の苦しさからの解放の心からです。

秋から冬にかけて、一切の生命活動が停滞し冷い隙間風の吹きさらす貧しい家屋に、ワラの中に薄着して寒い長夜の明けるのを待つ、食べるに糧なく、栄養失調の母の乳を求めて夜泣きする赤子、熱が出て薬も医者もなく咳のしわぶきがとまらぬ老人。ただジーンと辛抱して、「冬来りなば、春遠からじ」と、一日も早く春の来るのを待つ外ないのが、先祖たちの日暮しだったのです。

遂に春が来た、それを告げるのは、「芽」です。「芽が出たあっ」、それは生命のあかし、生きのびた安緒、新生の喜びの合い言葉でした。漢字の生命の「生」という字自身が、実は、大地から芽が出て、二葉が広がった形から作った字なのです。

また、日本語で、芽がふくらんでくることが「めぐむ」、その名詞が「めぐみ」で、漢字の「恵」の訓になったのです。

まさに、芽が出る、芽ぐむことは、大自然の生命のあらわれであり、天地の恩恵そのものであったのです。草木も虫もこの私もこの「いのち」を別にしてはいない。天地のいのち、神仏の生だから、目出たく尊いいのち、即ち「寿命」なのです。

「春」の日本語「はる」も、弓の「張る」と同意で、はりきる、天地の生命の張ることです。

以上のように、正月を迎える喜びは、まさに、天地の光明と生命の信仰をおいてはないのです。先祖の生活にとけこんだこうした素朴な宗教心を、今日の私たちはどうも忘れてしまったようですが、もっと、この民族的な宗教的心情を大切に伝えてゆきたいものです。

これと関連して興味があるのはクリスマスです。御存知のように、イエス様の誕生日を十二月二十五日とし、この救世主(キリスト、メシア)の降誕を祝う前夜祭にキリスト教世界では、すべての人が「メリークリスマス」と呼びかけ、この魂の救い主に祝福を捧げます。

しかし、イエスがこの日に誕生した証拠は何にもないのです。それでは、なぜ十二月二十五日になったかという、古来、ローマの世界にも、またゲルマン人の社会でも、いわゆる「冬至の祭」がありました。それが後に、この世界にキリスト教が弘まるにつれて、いつかこの日をキリストの誕生日にしたのです。

冬至の日は、一年中で夜が一番長く、昼が一番短い日です。太陽が最も低いところを通じて西に洗む。ところ

が、この冬至の日を境にして、再び、昼と夜の勢力関係が逆転します。日が段々高くなり、昼が長く夜の闇が短くなります。もう寒くて辛い冬將軍は敗れ、太陽が今までの劣勢をはね返して復活したのです。人々は、これを「不敗の太陽」と呼んで祝福しました。そして、いつしか、イエス・キリストこそ、人類を死と罪の闇点から救ってくれた、生命と光明の復活の救い主の誕生日とするようになったのでした。

さて、以上、光と生命への信仰について申し述べましたが、実は、信仰の本源と申せます。阿弥陀仏とは、インドの古語で、「アミターユス」「アミターブハ」とで、「アミター」とは、計量^{はかり}思量を絶した、いわゆる「無量の」という意味で、アミターブハとは「無量の光明」アミターユスとは「無量の寿命」のことです。この無量の光明と寿命の仏様によって、この天地万有すべてが照らされ、すべてが生かされている。そのみ仏を信じ、その如来様に帰依し、そのみ光とみ命を人格にいただし、その生活に顕現して行く信仰こそが、私たち浄土

の教えであります。罪惡生死の凡夫が、お念仏一つによつて、この光といのちを頂くことが出来る信仰であります。従つて、正月一日だけが目出たいのでなく、お念仏をするところ、毎日毎日が正月、いつも「光明と寿命」に復活する聖化の日々であります。そこに、この肉体が死する臨終すら、極楽往生の吉日と化すのです。いかなる冷たく暗い苦難の人生にあつても、一心に念仏してひとたび、この阿弥陀様の陽光に浴する時、明るく新たな生きる喜びと力が自然と湧いて来る道理があるので

す。
さて、本年は、この素晴らしいお念仏の信仰をお授け下さった、聖法然上人お誕生八五〇年の年に当ります。この勝縁をいかに生かすか、自己自身の再生復活の記念すべき年にいたしましょう。

静かに過ぎにし歳月を憶うとき、誰か旧来の自己を恥じぬものがあります。そこには幾多の悔いと改めとが必ずあり、変りなくそそぐ慈光の裡に、深く懺悔して如来の恩徳を感謝し、今年こそ賜わりし生命を汚さぬよう力強く楽しく明るく生き抜こうではありませんか。合掌

Ⅱ 好評 Ⅱ

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二三〇頁 価一五〇〇円
(二二五〇円)
(申し込み先)

〒 381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二



福 寿 草

清^{きよ} 川^{かわ} 宗^{そう} 治^じ

幸福と長寿を運ぶ福寿草

敵しい寒さの中で

小さく黄色にほころんだ花

暖かい花

優しい花

福寿草に

目を止めて

心を止めて

ひたすらに願う

——暖かくなりたい

——優しくなりたい

福寿草へ——

私は、小さな想いをかける

初雪



— 深川・木場の雪景色 —

細田隆善

(東京・三好勢至院住職
深川芭蕉記念館主任)

それぞれに初雪抱く玉砂利は
朝暎に映え煌めきてをり

深々と雪積りある庭先に

小さき万両朱き実を持つ

隅田川に雨降れば雨雪降れば

雪を唄へる童唄あり

茅葺きの小さき庵の蕉堂に

積りたる雪たちまち溶けぬ

庭先の石燈籠に積りたる

雪見つめてつぎの世憶ふ

斑ら雪残れる庭の低き木は

天台烏桕と樹名を掲ぐ

庭園の玉簾なす小さき滝

そこのみ黒く雪を溶かせり

橙^{だいだい}の夾^{はさ}にまとひたる雪衣^{ゆきころも}

朝光^{あさひかり}浴びて丸く溶けゆく

下町の屋根の形に降り積もる

雪を見降ろすビルの屋上

墓原^{はかばら}に雪降り積みて墓石^{はかいし}は

貧富の差なく雪を戴く

庭園にキャンパス据へて雪景色

描きゐる乙女のブーツが赤し

ふかぶかと屋根に雪乗せ上野駅に

みちのくよりの列車の着きぬ

雪女郎^{ゆきじやうらう}の話聞きたる雪の夜は

独りの宿に寝つかれずをり

札幌^{さっぽろ}の凍雪^{いでゆき}踏みしめ大道に

唐黍^{からこむぎ}食める若者のあり

ボヘミヤの雪原貫くハイウエイ

鹿に注意の標識の見ゆ

ミュンヘンの雪の舗道にまろぶとき

サンタマリアの鐘鳴り渡る

丘の上のゴシック寺院の鐘の音は

雪曼陀羅^{まんだら}の村に流るる

凍雪^{いでゆき}に転びしわれを抱きくれし

胸豊かなるドイツの女性

伍長たりしヒットラーここにたちしとぞ

雪をかぶりし建物古りぬ

ルッツエルンの乙女は笑みつつ樹氷^{じゆひりやう}背に

われのむけたるカメラに撮らる

ルッツエルンの雪に轍^{わだち}の跡残し

夜の町を行くゴミ清掃車



命へのめざめ

やす
安居 香山 さん

(大正大学教授・文博)

説いた。

人間は、頭でいろいろと考えていても、いざ現実直面してみないと、本当のことは何も分っていないのだということを、この程私は、やっと知ることができた。そしてそれは、私にとっては、誠に得難い、有り難い体験であった。還暦を迎えて、始めて命の有り難さにめざめさせて頂いたのであった。

数年前、私は浄土宗の布教シリーズに、「無常にめざめよ」と題した小冊子をものした。そこでは、善導大師の六時礼讃の無常偈を取りあげ、大師が、人生は無常であるから、その無常の死に直面してからめざめていては遅い。「健康で力ある時」こそ、その事実にめざめて、「常住」の世界を求めよとさとさているということを

更にこうした事例の一つとして、癌におかされた岸本英夫東大教授と、三橋節子さんという一人のうら若い画家の生涯のことを掲げておいた。二人は自から癌であることを知らされて、大きなショックを受けたが、苦悩の末、大いに決意する所あり、癌と闘いながら、命ある限り自分のなしうる最高の仕事をして死のうと決心された。そして、岸本先生は、それ以後約十年間、三橋さんは、たった二年間生きられたのであったが、二人共、立派な仕事をしてこの世を去られた。

岸本先生は、東大の図書館長として、立派な図書館を完成し、三橋さんは、二人の子供の為に、「湖の伝説」

という十枚続きの絵芝居を書き残された。梅原猛氏に言わせると、癌と知って以後の三橋さんの絵は、鬼気せまる傑作であるという。

私はこの二人の事例を掲げながら、この二人は、死刑を宣告されたものの、強い意志力によって、その死を乗り越えて人生を全うされたものとして、その偉大さを讀めると共に、われわれも、こうした人を手本として、たとえ癌にならないまでも、すでに生れた時に死刑を宣告されているのであるから、善導大師の教えにもあるように、健康な内に、常任を求める努力をしようではないかと、その小冊子では訴えておいた。

勿論、この時の私の気持ちの中には、「われわれ」という三人称的呼び方はしていたものの、その実私自身への反省でもあった。又、事実、いつなるとき私も、二人のような状況に立たされるか分らぬので、今からでも遅くない、その心懸けで努力しようという気持ちで筆を走らせ、又講演などもしてきた。

しかし、人間などというものは、或る時期にはそう考へていても、すぐ忘れてしまい日々の多忙の中に、眼の前の事のみに追われ、われとわが身を見失っているもの

である。それは、誠に哀れではかない存在という外ない。こうした私に、一大鉄槌が打ち落される日が、この七月突然にやってきた。



甚だ私事にわたる話で恐縮であるが、小さいながら一仏徒の体験談として、これを語ることを許されたい。

私は平素極めて元気で、僚友たちはそんなに飛び廻っていて大丈夫かと、よくたしなめてくれていた。決して健康というわけではなかったが、これという病氣もなく、気の趣くままに仕事や研究に精をだしていた。

この七月三十日、ある人に強くすすめられることがあって、いやいやながら一日人間ドック入りをした。二年前にも同様に世話になったのであるが、その時は、特にどこという悪い所もなく、医者からも太鼓判を押された。そんなこともあって、昨年は、別に何処も悪くないからという事で、ドック入りをお断りした。しかし、今年、昨年休んだこともあって、渋々友人にすすめられるままにドック入りした。

ところがである。胃のレントゲン写真を見せられて、

私は内心「アッ」と叫んだ。胃の中の上部に、三センチ大のこぶができていたのではないか。何も分らぬ私は「ヤラレタ」と絶句した。しかし、医者は冷静に、

「心配はないでしょう。まあ胃カメラを吞んでみて下さい」

と、事もなげにいわれた。しかし、周知のように、譬え癌であったとしても、本人に伝えないのが、今日の医学の常識である。当然の事ながら、私もこの瞬間、最悪のこともありうると考え、愕然とした。私は早速、お願いして、翌日胃カメラを吞んで検査を受けた。その結果は、二週間かからねば分らぬという事であった。

胃の事実を知ってから、私の総ての思考がこれに集中した。そして、最も恐れていた癌にやられたのであるまいかという不安が、脳裡を去らなかつた。勿論、その夜から睡眠薬のお世話になった。私は、病気に非常に弱い男である。病気は気の病というが病気になる、ナメカジが塩をかけられたようになって、よく家族の者に笑われた。ましてや、恐るべき不治の病に犯されたのではないかという事であれば、猶更のことであった。

胃カメラを吞んだ翌日、私は前橋のロイヤルホテルの

一室で一人いた。たまたま講演の約束があり、そこが宿舎であった。利根川に面したロイヤルホテルの一室で、真赤になって沈む夕日をながめながら、私の物思いは一段と深くなっていた。

「ともかく私は、はっきりと死刑を宣告されたのだ。いくばくかの猶予はあるとしても、その時は間もなくやってくるのだ」

そうした不安がつのと共に、私は死そのものに畏怖した。死そのものを恐れただけではない。私にはまだやりたい仕事がある。とても今死んではたまらない。何故、天はこの私を見離したのであろうか。私は、私のはかない運命をのろった。

テーブルの上には、伝道教会の仏教聖典とバイブルが置かれていた。溺れるものは薬をもつかむ思いで仏教聖典をめくった。何ページかを読んでいるとき、ふと私は、

「生ずる者は滅す」

という、見なれた語句に直面した。しかし、その瞬間、私は強い雷光に打たれたようなショックを受け、その語句を見つづけていた。

「そうだ。これだ。これが生を受けたものの真実相で

はないか。早かれ遅かれ、この真実はくるのだ。無常とは、この真実相を裏返したものではないのか」

今まで何度か聞かされ、自分も人に語りかけておりながら、現実には直面したとたん、錯乱している自分を見いだし、私は啞然とした。私の今までの昏迷は、この実相を直視していなかったからに外ならない。

たまたまその実相が、最悪の場合であれば、癌という形ででてきたに過ぎないではないか。死刑の宣告が、具体的になっただけではないか。何故早く、これを超克しないのか。こう考えてきた時、私の眼前に、一条の光が指し込んでくるのに気がついた。私は「ハッ」と吾にかえった。

「そうだ。これだ。一体私は、何を迷っているのだ。自分でも、あれ程にこのことについて物にも書き人にも語ってきたではないか。この無常こそ、人間のすべてではないのか。この無常を越えてこそ、本当に生きる道があるのではないか」

誠に単純な到達点ではあったが、私は何か今までの昏迷から、やっと抜け出した思いであった。

「まだ何も癌と決ったわけでない。然し、もしそうで

あったとしても、それはどうすることもできぬ現実ではないか。私自身、この現実を直視し、これと闘い、矢尽き刀折れたとき、一切は終るのである。それまでにやるべきことはやろう。そして、近代医学の力も借りながら、敢然と癌と闘ってやろうこう」

決意した時、西方に沈む真赤な夕日が一条の光明として輝き、何か忽然と悟ったような気安さと、何葉という勇気が体内に湧いてくるのを覚えた。

私は二日間の講演も、誰にも何もいわなかったが、楽しく元気にやった。そして、何か講演そのものも、馬鹿に力と熱が入っていることが自分には分った。

その夕方、家に帰った所、私が至って元気で明るい顔をしていたので、家内はいぶかりさえた。

「いや、とも角、決意でできたのだ。そして敢然と人生と病氣とに闘うことにしたのだ」

そして、私は、早速に知人を頼って国立ガンセンターを訪れ、専門医の指示に従った。そして、この九月九日、胃を開き、できものを切除する開腹手術を受けた。

誠に幸いなことに、このできものは良性の腫瘍で、筋腫に似たものであったようで、九死に一生を得たの

であった。しかし、早期発見でよかったが、遅れていれば胃そのものの切除ということもあって、不幸中の幸いであった。お蔭で手術後の経過も良好で、退院する日も近い。今この筆は、病院で綴っている。

話はこれだけで、皆さんにとっては、たわいないものであるが、しかし、私自身にとっては、この夏は誠に衝撃的なことであった。そして私は、この衝撃の中で、誠に得難い体験をさせて頂いた。それは、いうまでもなく「命へのめざめ」ということであった。

そこには私なりの勝手な先走った苦慮も手伝っていたが、最悪の場合を予想した私にとっては、何者もかわることのできない、私個人の生命との真剣勝負であった。この竿頭に立った時は、最早や何人も、私を助けることはできない。所詮孤独な私自身がすべてとなるのである。いかに恩愛の情深い妻子でさえも、同情こそすれ、この苦難を救うことはできない。

今こうして筆を取りながら、あの時は随分慌てていたなど追憶はしているが、若しそれが最悪の結果にでていたら、こんな呑気なことは言っていられぬ筈である。そして、あの時の真剣さが、何か他人事のように思われる

のも、「のどもとすぎれば、熱さを忘れる」の例にもれず、人間のおろかさであるかも知れない。

しかし私は、腹を切るという痛い目にあわせてもらった以上に、譬え短い期間ではあったが、命というものを真剣に考えさせてもらい、私というものを、命がけで反省させてもらえたことを、この上なくあり難く思っている。そして更に、そうした時に当って、比較的早く、自分自身の苦悩を超克し、寧ろ勇気を以て、この苦悩と闘う決意のできたことに何か安堵の気持ちで一杯である。

これも又、私なりにではあるが、法然上人や善導大師の教えを身に体し、念仏生活をさせて頂き、己にも言いきかせ、人にも説いていたお蔭によるものと、今更のよう

うに感謝している。

還暦と言えは、今日の世の中ではまだまだこれからであるが、私にとって今度の事件は大きな人生の一区切りと思えてならない。そして、これからの人生が、何か余生のように思われる。この余生を、私は、私の為にも、又お役に立てば世の為、人の為にもお尽したいというのが、謙虚な気持ちでの私のいつわりのない今の心境である。

ロンドンの虚子先生句碑再訪の旅



それは昭和五十六年春まだ浅い鎌倉の寿福寺の玉藻会での席上でした。「三九さま、五月十二日〜二十一日、キューガーデン再訪ときました」と書いた、当日の鶯色の投句短冊を、選者の高木晴子師から戴いた。

一昨年五月十日の虚子先生句碑除幕式から満二年、待ちに待った再訪の日が来たのである。万事とんとんと準備が進んで行った時、晴子師がホテルの駐車場で躓いて

右膝の関節を傷められるというハプニング。でも入院後間もなく全快の目途が立ち、晴子師の車椅子に乗ってでもという強い決意で八月二十二日出発がきめられた。

愈々出発の数日前、かねて心配していた米国の航空管制官のストの影響の減便で、予定の英国航空BAに乘れなくなり、パンアメリカンPAでサンフランシスコに行き、BAに乗り継ぐことに決定した。その結果羽田離陸

塩山三九
（俳人）

が最初の二・三〇より一九・〇〇と繰り上げられたが、お蔭で同夜関東地方を走り抜けた台風の先駆の雨にも会わず、孫に鞆を持たせて東京駅八重洲口発一四・三〇分の特別バスに乗車、漸く時折雨の降る中を成田に到着、結団式など型の如く、ジュースでこの行の無事を祈って乾杯。

PA機は前回のBA機と同機七四七型ジェット機ではば満席、国際色豊かである。ストの影響か出発が少し遅れて一九・四五分離陸、上昇後間もなく台風のためか气流が悪いとの機長のアナウンスでやや動揺したが、ここも無事通過、二一・〇〇分夕食、二二・〇〇分映画と続いた。映画の途中からうとうとし始めたが時差の関係で〇〇・三〇分には早明るくなって来た。〇二・三〇分朝食、米国式で簡単、ジュース、パン、メロンだけである。

米大陸が近寄って来る。彼の有名な金門橋が見える、〇四・三〇分着陸。現地時間一二・三〇分である。空港には前便の客が手続中として大分待たされる。おまけに我々のグループには米国経由が急にきまったためビザを受けていない者が多く、ここでの六時間の乗換待ちを利用

して見物をしようと云うので、全員の旅券をまとめて預ける必要がある、結局旅行会社手配の観光バスに乗るまでに二時間かかった。

空港は存分に埋め立てられて広々としている。快晴で日向はばかばかしい気持だが吹く風は早秋めいている。町には摩天楼が林立して流石は西海岸の中心地であるが裏山には早霧が立ち罩めている。冬は寒いので恩給生活者達はロスからサンデゴあたりの暖かい所に家を構えているそうである。

漁夫波止場へ着く。ここはこの町の歓楽境で昔の木造の巨船が繋いであり、人々は乗船券を買ってぞろぞろ見物している。観光用のヘリコプターが霧の中から突然出て来る。桟橋にはカジノ風の建物があり、折柄日曜の午後とて、日本の盛り場並みの混雑である。サベラという蟹料理専門の料理屋があり、一行の到着を待ちくたびれていた。私達も朝が簡単だったのでワインの盃を傾け、殆んど眠れなかった一晚の疲れを医やしたのである。

ロンドン行のBA機七四七型は一八・三〇分離陸。見飽きた氷の陸と海の上を一気に飛んで定刻一二・〇〇ロンドンのヒースロー空港着。団員三五名は観光バスで繁

華街の中央、ピカデリーの地下のバブ、ヘンケイ・インで昼食。前回もここを一度利用したが堅い牛肉で手こずった経験で、岡本四郎名派乗員の手配で我々向きの魚料理が出されたのは好評を博した。食後サイヨン公園などを見るグループと、ホテルに早く入って休養するグループに別れ、夕食はホテルの地下の迷路のような廊下を通じて小じんまりした食堂ですませた。

この休養で漸く元氣を取り戻した一行は二十四日〇九・〇〇分バスで出発、ここで前回からお馴染みのポーナス教授ご夫妻が同車、一行は大喝采。バスは目貫きの町を過ぎ、めざすキューガーデンへ。正門前へ着いたのは十時前であつたので、塀の外を廻って開門の十時に再び到着する。ブレナン園長はオーストラリア出張中とて、副園長、事務局長などが出迎えられ、晴子師外一行と歓談の一刻、やがて鉄の門が我等のために開かれ懐しの園内に進む。折角のおいでに花がなくて申し訳ないとして、大温室を開けて珍らしい熱帯植物を案内された。

我々の句会場として、珍らしい標本を陳列してある池に面した博物館の二階の大会議室を開放して下さった。

紫の花咲きキューの秋蘭くる

三九

鴨が居り黒鳥が居りキューの秋

同

懐ききものにブラックバードかな

同

披露が終り、園側のご案内で小食堂で昼食をご馳走になる、食堂の外には葡萄棚があり、赤系統の明るい小卓子と椅子が並べられてあり、丁度日比谷公園にあるレストランのような感じで家族連れがセルフサービスの昼食を楽しんでいた。

ここで愈々今度の目玉の虚子句碑にまみえることになる。一昨年の春の除幕式のときに献木した桜も躑躅も勢いよく枝を茂らせていた。一同は代る代る句碑に遙る遙る日本から持って来たものを供え、句碑をさすり久潤の情を叙したのである。句碑には、

雀等も人を怖れぬ国の春

虚子

とあり、すぐ側にシェフィールド大学の日本語に堪能なポーナス教授の名訳が、やや小型の碑に嵌め込まれている。

この句はロンドンのPENクラブの招待で渡欧されたとき、在留邦人の有志とキューガーデンを訪れ総勢十六名で句会を行なったとき詠まれた一句である。

晴子師は玉藻の句友達と海外旅行をすでに七、八回行なっておられるが、キューガーデンの美しい風光に強く感銘され、ここに父虚子の句碑を建てることを思い立たれ、ブレナン園長に会い親しく建設の位置を取り決められたのである。そして賛同者の協力の下、話ほとんどとに進み、石の選択、彫刻も終り、当時の郵船ロンドン支店詰めであった有吉義弥（俳号瓦楼）氏の斡旋により郵船鎌倉丸で嘗て虚子先生が通られた海路を無事ロンドンへ到着、一昨年五月十日、英国側農林次官以下、日本側門田公使以下、日本からの八十名の玉藻句友を含む総勢二百余名の見守る中でブレナン園長、晴子師の手により除幕されたのである。

私事で恐縮であるが虚子先生のPENクラブ講演会の当日、私は会場の日本人クラブにいて今日は日本から有名な文人が来て講演をされるということを仄聞したのであるが、当時俳句に全くの門外漢であった私はこの千載一偶の機会を失なったのである。そして終戦後のもて余

した時間を有効にと俳句を始め、虚子先生にもお見知り戴いたのであるが時すでに遅しであった。

この日の夕食は宿舎のチャーリングクロスホテルにボーナス教授夫妻を迎えての楽しいまじりであった。

二十五日ロンドン発、空路オランダのアムステルダムへ、運河と風車とチューリップの国であるがチューリップにはもう遅い。昼食後遊船で運河巡り、所々に今は使われていない大風車が観光用に残されている。今日のご婦人達のお目当てはダイヤの研磨工場で、一応工場の入口の宣伝用の研磨機のところを割り方の講釈があつてから二階の別室で製品を見せられる、触れこみは識別法などの説明であつたが、やがて日本人の担当者はそれとなくここで買えば日本の半額位などと切り出す。ご婦人方も馴れたもの。この前は云々など会話に実が入り眼が爛々と輝き出す。男性軍は早々退却してバス内で待機、結局随分待たされてしまった。

そして薄倅な少女アンネの部屋を一巡して、ホテルアボロへ帰り夕食。終つて、食堂の隣のロビーを占領して句会。

二十六日は朝から郊外へ。森林公園を抜ける。鹿のマ

イクの立札がある。自動車に鹿に注意せよとの印しだそうである、月見草がちらほら咲き、なかなか美しい。

花好きのオランダ人は家毎に花を植え。紅い薔薇を咲かせている。梯子をかけて家根の手入れをしている家もある。運河沿いの家には専用の舟着場があり、ヨットを繋いでいる。国富めりの感が深い。

マジユロダムというオランダの鳥瞰図を模型に仕立てた小公園に着く。有名な建物、広場、駅、埠頭など美事に出来ている。我々は小人の国に紛れ込んだような気分で一と巡りする。順路も狭いので追い越したり逆行したりするのは他人迷惑である。

ここから海岸のスケープニンゲンという保養地へ出る。カジノなどの大規模な遊び場がある。海は名にし負ふ北海、まだ八月下旬というのに海の色は淡く荒寥としている。

北海の冬めくさまを砂丘より
北海の冬満荒るるいつよりぞ

三九
同

遙かに巨船が一隻見えるだけ。海底油田掘削のリグが一基ぼつんと立っている。

近くに鯨の漁港があり、簡素な店が建ち、観光客に生まの鯨を食べさせている。尻尾をつかんで逆さ吊りにして大口開けて食べるのである。

国際司法裁判所となっている有名なヘーグ王宮に着く。セラニウムの花盛りである。正門の扉を開けてあり、観光客は二三歩門内へ入って写真を撮って順に立ち去って行く。

由緒あり気な飾り付けの古めかしい料亭で昼食後、アムステルダムに引返す。王宮前のダム広場にバスを捨てて民俗衣裳や木靴などの土産物漁りが始まる。

次は特別に大きい観光用の風車の前へ。人物をうまく入れて全貌を写真に撮ろうと一同苦心する。バスで運こんで来た車椅子を出して晴子師に乗って貰って記念撮影をする。ここがアムステルダム公園の入口である。全園はよく整備されて美しい。五月には石楠花、薔薇が華麗な由。

小高い所が音楽広場となっており椅子が配置されている。ここに休んでいたオランダの一老人を一行の若いと

ところが写真に撮ったところ出来たら送って呉れと住所を書いて渡していた。後日この女性に会ったところ余りよく撮れていないのでどうしようかと相談されたが、とに角送った方がよいと勧めておいた。これもオランダ、日本親善の一つのかけ橋となるであろう。

夜は昨日同様夕食後句会。

明け方目をさますと、お天気は上々らしく、カーテンの隙から見える空には細月が。

月いよよ細しアムスも今日名残り

三九

オランダを去る秋冷をひしひしと

同

ベルギーとの国境近くで、

風車あり原発があり花野あり

三九

ベルギーの古き都ブルージュに入る。世界にネットワークを張るホリデーインがここにもある。古い二階造りの煉瓦建てのホテルで落ち着いた気分ではっと一と息を入れる。

秋日濃し古都千年の石畳

三九

観光馬車がぼかぼかと石畳の上を走っている。すべてが古い。修道院、ノートルダム寺院、市庁舎、魚市場と見て廻って遊船で運河を一巡する。アムステルダム運河とは違って小規模で遊船同志のすれ違いは文字通りすれすれである。どの国の人が知らねども、人懐こく手を振り合って行く。

レース編みの実演と云われて見に入ると実は土産物屋で、ご婦人達の購買慾は俄然旺盛となる。ホテル夕食後句会と型の通り。

二十八日首都ブラッセルに入る。市庁前の広場は建物が豪華で、春はこの広場に花一杯飾られるという。町角の小使小僧の像は案外小さくうっかりすると見過しそうでもある。

繁華街のホテルスケールで昼食。

バスで国境通過、西日輝くバリに入り、凱旋門近くのラファエットホテルに着く。

ロビーに寛いでいると、つい先刻、ハンドバックをひ

ったくられた人があるとの注意がある。貨幣交換をしたとき、窓口近くに小ざっぱりした服装の少年がうろうろしていた。パリも油断でなくなつたとつくづく痛感する。

夜はセーヌの舟遊び、なんと今度の旅は三回の舟遊びが予定されていたが、これこそ掉尾の圧巻であつた。グループごとに食卓に就く。上甲板ぶつ通しの食卓で千人は優に収容できそうで予約で満席とのことである。銅羅が鳴って解纜、シャンパンが抜かれ一同高らかに乾杯、陽気な音楽師がアコーディオンを鳴らして客の求める曲を奏でる。飲む程に酔う程に移り行く陸の景色などそつちのけで、グループごとに歌が出て賑やか。豪華なフルコースのフランス料理を楽んだ。玉藻グループの若いご婦人方の席ではコーラスが繰り返され船内の人気を独占するような形になった。かくて夜も更け人通りの少なくなつた頃岸壁に立ち戻つた。

二十九日、パリへはじめての人達は市内観光へ、残りは郊外のシャンティエ宮殿へ。ここは日本人観光客の減多に訪れない静寂な古いお城で、この日応援に駆けつけた日本人ガイドも初めて来たというところ。暖い日射を

浴びて噴水の池を囲む青芝を逍遙。近くのクレコンデという小ざっぱりしたレストランで昼食。ここはこの町の名士達の溜まり場らしく、お得意様が三々五々と車で乗りつけて静かに昼食を楽しんでいた。

夜は有名なリドの踊り見物組がいそいそと出て行つたあと、パリの最後の夜は、晴子師を訪ねて来られた在留の晴子師の兄上池内友次郎氏夫妻を迎えて晩餐会。ホテルのこの食事は誠に思い出に残るご馳走で、ワインの乾杯で夜の更けるのも忘れる程であつた。

三十日BA機でパリ発ロンドンへ、ロンドンで日航機に乗換えてアンカレジ経由成田へ向つたが、ちょうど中間位で悪気流に突入、機は上下に激しく揺れ、機長から乗務員も着席せよとの放送があり、暫らくの間乗客一同しんと静まって生きた心地はしなかった。然し流石は日航、びたり予定時刻に成田着。この行、色々ハプニングがあつたが幸い連日快晴で愉快な旅を続けることができた。

浄土句集

一田牛畝選

影が追って来るようである。

寺町の賑わうひと日秋彼岸
福岡 原 敬二郎

東京 真野 竜
緋衣の僧白髪似合ふ盆会かな

評 秋の谷水は少くなつて流れている。山

奥の静かな谷の岩に触れて、静かに音立て流れる水音は、耳を楽しましてくるのである。

東京 吉田ゆきゑ
平安の塔の壁画や石露の花

群馬 島津 か寿
ベルの音秋のしじまを打ち碎き

評 緋衣被着は最高の僧階所有者である。頭髮が黒々して居れば、緋衣は似合わぬかもしれぬが、白髪の僧には似合つて拝みたくなる。

東京 吉田ゆきゑ

御法話を聞く背に秋の陽を浴びて

福岡 荒牧 還愚
玻璃戸閉め日向ぼっこの一時刻を

福岡 高良 慈風
十字架の石灯籠や石露の花

評 小春日和の御法座らしい。秋陽を背にして、うとうとと聴聞、心は何時となし

福岡 服部 光代
咲き続く底紅氣品失なわず

評 石灯籠の目立たぬ所に十字架が刻まれている。かつて隠れ拝んだ悲しい物語りを、石露の花の淋しさが物語っているようだ。

東京 新井 新生
人影の追ってくるよな良夜かな

三重 山田 うた
老僧のよせる落葉を風が追う

東京 細田 初枝
岩に触れ声となりたり秋の水

評 月の道をうとうとと一人歩きは何とも言えぬのである。静かな中に何となく人

荒牧 荒牧 亀齡
石仏の御手に通ひある鳶紅葉

東京 栗原やえ子
街道の古き馬小舎赤とんぼ

東京 阪入志津枝
只一つ弾け実石榴枝にあり

三重 森 静枝
時雨忌の出入の中に吾も居し

東京 原 とも子
白糸の滝のあたりの男郎花

東京 猪瀬 幸子
お六櫛掌にしみじみと夜の秋

山梨 青山富貴江
かまきりの色変りはてあわれとも

東京 吉原登起子
秋草を活けて住み古る山の宿

東京 田中 秀代
葛の花こぼるる小径寂しさよ

山口 上野 明達
お十夜の礼拝回向こだまする

東京 鈴木 葉子
青銅の壺に秋葉たつぷりと

東京 真野よし子
路地裏に子等の石蹴り赤のまま

福岡 安藤平次郎
観月と太字提灯買ひにけり

福岡 高良 幸代
禁猟区湖に鴨来て賑やかに

東京 小笠原香祥
幼き日見覚えの坂木樺咲く

福岡 植藤みきを
壁面に歌舞の諸菩薩古寺の秋

三重 山田 うた
赤い羽根募金横眼に通うけり

東京 満尾衣有子
栗の実の青く落ちたる惜まるる

大分 丹羽 難中
ご法嗣の決まりし寺の十夜かな

山形 松田 光誉
読経の一と声澄むや鯨雲

東京 末常てる子
独居に慣るるも寂し露の宿

福岡 前田 秀峰
思ひ出に香港土産香水を

山形 松田 允子
落書きの残りし土塀秋深し

福岡 上滝津弥音
秋灯や大師の作の不動尊

一田 牛畝
屠蘇の床軸の太きな寿の一字

表紙のことば

「赤富士」

大西耕三

明けましておめでとうございます。

昔からお目出度い初夢として、一富士、二鷹、三なすび、と云われた様に富士山は日本の象徴であり、お目出度いものの一つとして数えられている。

『浄土』表紙、正月号に相應しい絵を、色々と苦慮した末、結局妙案が浮ばぬまま、厚顔にもありきたりと思える赤富士を選んだ。

北斎の赤富士が余りにも有名なので、我々の赤富士ではどうも俗ほく見られがちだが、恥を忍んで御勘弁願うことにしよう。

— ○ —

毎年俗に運勢暦と呼ばれている暦が相当部数出版されている。その中に未だに六曜、つまり先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口、

といったものが書かれているのが不思議でならない。現在はこよみとしての六曜はすっかり廃れてしまっているのに、変な迷信みたいなものだけが生れてきてしまっている。そのことを知らなければ済むことを、知らされる為にどれだけ日常生活が拘束され、便利さよりも却って不自由なことになっているか……一例を挙げれば二、三の例外を除いて大安の日の結婚式場は、その日に集中し、式場は超満員で、おすなおすなの盛況、それと反対に仏滅の日は閑古鳥の鳴く様な有様である。

では一体六曜とはどんなものか、一週を七日、これで区切つてゆくのが今のやり方の七曜、明治になつて正式に政府で決めたものである。一週を六日として、これで区切つてゆくやり方が六曜です。つまり大安とか仏滅と

か友引とかいうのは、その言葉自体には何の意味を持たない曜日の名前だったのです。

六日に一度ずつきちんと吉日や凶日が廻つてきたりする方がおかしいのです。

易断関係の人も運命学からみても六曜は何等根拠のない迷信に過ぎないとはっきり断言しています。一種の娯楽としてみる場合の数々の占いはそれなりの意味もあるが、何の役にも立たないばかりか、日常生活の中で無用の神経を使わす様な迷信を世の中に情報と流す根源を断てば、こんなことに左右されなくなるわけです。

要するに運勢暦その他の一切の暦から六曜を抹消すればよいのですが、さてどんなものでしょうか。



(読)
(者)
(の)
(べ)
(ー)
(ジ)

祖母は哀しき菊仏



まつ
もと
やす
こ
松本恭子

(京都市北区在住)

深まりゆく秋の中、私の最愛の祖母の一周忌がもうすぐやってきます。

そうして私は今、京都「三千院」に来ています。色づき始めた紅葉、そして杉苔は海のように広がり、木の切り株がぼつり、ぼつりとまるで孤島のようにも思われます。かと思ふと杉の木がいくつもいくつも天にむかつて突き抜けていて浄土の祖母のもとまで届くような高さでした。

京への旅を目前に逝ってしまった、最後の祖母のつぶやきを昨日の日のごとくに思い出しではこんな形で杉の木の高さを眺めることになるとは思つてもみなかつた、杉の木の哀しい高さでした。

祖母の忌くる 秋天を突く杉木立

昭和五十五年十一月十七日、六時三十分。



私はその時刻、遠く離れたこの京の地でとても大きな物音を感じました。それが私の感じた祖母「ゆきの」の死でした。

確実にひとつの命が消え失せてゆくまでのあの言葉にならない瞬間の季節を、今また新たに私は埋葬してゆくのです。

祖母は寺で生まれ、育ち、そして三十数年を寺の坊守として仏に仕えてきた人でした。

私は幼少期を祖母の手によつて育てられました。幾多の苦勞多き祖母でしたが、持前の気丈さと明るさでどんな日も笑顔を忘れない人でした。また年老いても常に学することを怠らない聡明な女性でした。

私はそんな祖母を尊敬し誇りにも思っていました。

祖母の病いは絶望的でした。

祖母の腕に広がる青い注射跡を私はこれ程、ドキ、ドキした思いで眺めたことはありませんでした。それはその辺の悲しさや寂し

さなどではかたづけられないような、焦りにも恐怖にも似たとても重くて深い心の痛さでした。

食も衰え、わずかにみかんのしぼり汁を祈る思いで勧める日の、時に「美味い」とつぶやいた祖母の瞳をみつめながら、私はある小さな瞬間かたく目をつぶり、遠くで白い花が散るのを見たような気がしました。

病み耐えて祖母 冬空ばかりをみつめて
る

仏の道を信じ、その臨終にも手を合わせ念仏を唱えながら逝った祖母。その白すぎるほどの枕に深くくぼみをひとつ残して祖母は逝ったのです。

臨終の祖母の傍に かたえ ひとつ蜜柑
菊冷えの枕のくぼみ 祖母は逝った



祖母は菊の花を深く愛した人でした。その菊の花の一番美しい季節に祖母は仏となったのです。

菊明りの夜、祖母はとても愛らしく、まるで眠っているようでした。

もとより色白で美しい肌の祖母はその死化粧に薄桃色の頬をして菊に抱かれてとても安らかそうにみえました。

私はふるえながら、ふるえながら静かに頬に触れました。おもわず氷のような冷たさが、指先から体の中に走りました。

何かが陥ちてゆくようなそんな冷たさでした、哀しさでした。

こんなに冷たく祖母 菊明りの夜

寒菊に 祖母の死化粧美しく

埋もれて祖母のかんばせ 菊浄土

亡き祖母へ 菊は浄土の道しるべ

私は静かに眠る祖母を前に、たとえ話さな

くてもいい、笑わなくてもいい、このまま傍に眠り続けていて欲しいと思いました。

でも祖母は煙りになったのです。

私はあの数千数の時間を決して忘れることはできません。

冬の青空に、黒い煙が高く、高くのぼりゆきそして消えてゆくのです。

私は両手を合わせて祈りました。

熱くないようにと祈りました。

そして今、どの辺が失なわれてゆくのだろうと私は祖母を苦しめた癌細胞が殺されてゆくのを、全く違った次元のある快感を感じました。

そして祖母の命は花びらのごとく白く、小さく散ったのです。

冬青空 祖母が煙りに風になる

風やんで 祖母は哀しき菊仏



念佛ひじり三國志 (空)

——法然とゆづる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

何としても仁和寺の御所へ出向いて坊門局に会わねばならない。松虫、鈴虫の姉妹をあの尊長僧都へ引き渡した経緯にはどんなからくりがあったのだろうか。その真相を究明しておきたかった。

安楽房は、御所へ参入する手だてを、生仏に頼んだ。

ついこの秋ごろまでだったら、そんな面倒をかけずとも、ずかずかと坊門局に会うことができた。仁和寺御所の周辺で常時に六時礼讃の集会をひらいており、母公自身も気軽に列席していたからである。

お互いが警戒し合うようになって六時礼讃会も中絶さ

れたのが、年のあらたまったこの冬口からだ。尊長僧都や那智ノ検校らがうろうろしはじめたのが原因だった。仁和寺御所の塀は、安楽房にとって高いものになった。夜が明けたら早速、と生仏は気安く応じてくれた。近ごろ御所の女房たちは生仏を師として琵琶の手習いを始めたという。三日にあげず仁和寺へ出向いている生仏であった。

「母公さまが、じきじきに当方へお出ましになるそうですよ」

昼さがり、御所から戻った生仏はやや昂奮したおももちで報告した。

「じかに当方へか」

<清水寺>



「今宵から弥勒堂へお籠りなさるそうです」

「ご参籠……」

安楽房も胸先に軽い衝撃をおぼえた。

仁和寺の母公——坊門局は安楽房の要請をいれて面談するために、仰々しくも「参籠」までするというのか。この参籠にもっと深い意味はふくまれていないであろうか。

とは言っても当時の貴族たちにとって参籠はそれほど仰々しい行動ではなかった。ことあるごとに彼らは鞍馬寺、石山寺、清涼寺、雲林院、長谷寺などへ籠もって世塵を避けた。とりわけ女人は清水観音やここ太秦の広隆寺をえらんだものである。

でも広隆寺には安楽房が待っているのだ。坊門局にとってこの参籠は世塵を避けることになるのであろうか。その参籠だが、高貴な身分の人を迎えるとなると、寺側ではひと騒ぎをする。修法堂の一隅に「結果」を設けなければならなかった。

結果——四囲を高い屏風でかこった密室である。参籠者はそこへ籠もったら、所定の日数が満たぬあいだは一步も外へ出てはならない。経机に香や揺（しきみ）のほか、

盥(たらい)手水、用便の壺までを用意して、誦経、写経、礼拝に明け暮れて、食事や排便もそこで足すのである。端座したまま睡りこむ。

そんな夢寝に仏が現前し給う。この「夢感」こそを仏と修法者との交流として、人々は尊んだ。参籠の効頭であつた。

後鳥羽院の中宮で、仁和寺法親王の母公、と言えば広隆寺が迎える最高級の参籠者だった。生仏の報告を受けて「結界」の設営に僧たちは走りまわった。

母公が使用する仏具、什器に手落ちがあつてはならないのはもちろんだが、付添ってくる女房たちの人数も問題である。彼女たちも母公にならう参籠するのである。

「母公のご参籠は初めてか」

安楽房は念を押すようにして生仏にたずねた。

「いいえ、すでに四度、いや五度……しかし、いずれも大殿の方でして弥勒堂ご参籠は初めてです」

「あちらで参籠する人は？」

「それが今度の母公が……」

「なぜそんな場所でなさるのだらうか」

「さあ？」

生仏も坊門局の意図を把握し兼ねている。

広隆寺の弥勒菩薩像——半跏思惟像とも呼ばれる。右足を左腿へ按じ、悩ましげに首をかしげ、右手の細く長い指が「印」を結ぶともなくその頬に触れている。明らかに女人仏であつた。それもこの国ではちょっと見あたらない西域女性の容姿だ。

その膝下に何日間か録りきつて、坊門局はどんな「夢感」を得たいと願っているのだろうか。

入り合いの鐘がつき出されるほんの少し前、母公の一行は広隆寺へ参着した。壺装束の七人の女房たちにかしづかれた赤糸毛の牛車は仁王門の手前で停まった。牛が外ずされ、踏み台が用意されて坊門局が降り立った。すつぱりと紫地の狩衣を羽おったままで、誰もその内を覗き見することは許されない。

中ノ門のところへまで来た。その門外で女房たちは母公に別れを告げた。参籠者は坊門局ただ一人だったのである。

仁和寺から供をしてきた僧が、中の門内で出迎えた広隆寺の阿闍梨に何かをささやいた。うなずいた阿闍梨

は、大殿の向拝の前までみちびくと、そこで略儀の礼拝をおこなった。

狩衣をぬいだ坊門局は白一色の綾装束。黒髪のもとどりを、黒帛たばねていた。白蠟のような手につけた数珠の点光が眼に鮮かであった。大殿に三礼をすませると、そのまま左手の小径を踏んで進んだ。阿闍梨たちに見送った。小径の奥に弥勒堂が建っている。仁和寺から供をしてきた僧も、そこまでだった。

そのころ安楽房や盲目の琵琶法師生仏は、坊門局がなぜ参籠を弥勒堂と指定したのか、彼女の意図を知ったはずである。母公参着の直前、仁和寺からきた使者の口上によると、参籠の戒師に安楽房遵西を、侍者に生仏を名ざしていたからである。

大殿での参籠なら、当然広隆寺の阿闍梨が戒師となる。在野の「ひじり」などにそんな越権は許されない。しかし境外仏堂たる弥勒堂とあれば、事態は異なる。

安楽房は弥勒堂のきざしの下で母公を出迎えた。ほぼ一カ月ぶりの対面になるか。

坊門局のやつれぶりはひどかった。頬の肉がげっそりとそげ、白桂（うちぎ）の肩先も薄かった。

病んでいる。それも、心がひどく病んでいる。

ただ安楽房を見上げて微笑みかけてきた眼の光りのなかだけに「生色」がただよった。血色が全く脱色していた面上で、この瞬間だけ臉の周辺に紅がひろがった。

「懺法を……」

呟くように坊門局は言った。

参籠の初段は当然戒師の前での懺悔だが、わざわざ断わるあたり、彼女が安楽房との対話を求めていることは明らかだった。

しかし、その懺法を開始する前に、入堂した修法者はさまざまな参籠の手順をやったのければならない。安楽房たちは、昇殿してゆく坊門局を見送ったあと、いったん殿司へ引き揚げていった。

広隆寺の境内に、いんいんとタベの鐘がひびきわたっている。

杖にすがって歩きながら生仏は、ふと足をとめた。

「眼に泌みるような光景でございました」

「何が……」

「あなたと母公とがいまお出会いなされた姿がです」

「眼に泌みると申して生仏どの。そなたには何も見えぬ

はずだろうが」

「じゃによって、なおさらお二人の心、心の呼吸づかいが泌みでくるのでございます」

「どんな呼吸づかいかな」

「安楽さま、あなたはともかくとして、母公さまのあなたへ寄せられる想いは、なまさかなものではございません。このたびのご参籠は……」

「何があるのか」

「再び御所へはお歸りにならず、ご出奔では？」

「ご出奔——」

たしかに広隆寺へ現れた坊門局には何やら異常な決意のようなものが感ぜられる。

二

「妾がおかれた境涯を思いまするに、そこは地獄、魔界と申すほかはございませぬ。いとおしいお方を呪い、愛でてきた骨肉の者に日夜恨みをこめて生き続けねばならぬのでございます」

坊門局の懺法が開始されている。

広隆寺の境内はすでに深い闇の底にあった。わずかに

弥勒堂からひとすじの灯りが洩れる。弥勒菩薩のお顔を照らす燭燭の光りだった。作法に従って安楽房は高屏風の外側に控え、坊門局の告白を聴聞していた。かたわらに盲目の生仏が端座する。

告白の内容は……坊門局には同腹の妹が二人いた。すぐ下の妹は元久元年（一二〇四）十三歳で源家実朝の御台所となって鎌倉へ下った。末娘は昨春数えて十一歳、行儀見習のために仁和寺御所へきて姉坊門局の身辺で暮していた。いづれ二、三年もすれば近衛少将に妻合わされる話がまとまっていた。行儀見習とは言っても未だ「髪上げ」もしていない童女である。二つ年下の法親王——坊門局の息子と遊びたわむれるのがせいぜいだった。

去年の七夕祭り。珍らしく御鳥羽院が仁和寺御所へ現れた。酒宴を催したが興が増したもののか、そのまま泊ると言い出された。近ごろ院の「寵」が薄れたとは言え坊門局も二十六歳、女盛りである。久方ぶりのお情けを頂けるものと、夜具に香なぞ焚きこんで、顔作りも念入りにして闇房で待ち受けた。

襖が開かれ院は枕辺に立つと、じろり坊門局を見おろして、「西の方よ——」とにべもなく妹娘の名を口にし

た。未だ「西ノ方」などという女御名なぞもらったわけではなかったのだが、この瞬間に妹はその呼び名になったのである。

あの子は未だ「髪上げ」も「裳着」も済ませておりませぬ。つまり女に成ってはいないと申上げるのが姉としてのわずかな抗弁であつた。院は豪氣で粗暴な性格をむき出しにして、さっきの酒宴で見かけた西ノ方はもはや立派な女人——「十一歳？　さすれば余は十とて一つの月日を待ち暮しつる」と冗談とも本音ともつかぬ言葉を口にした。

空しく閨房を立ち出た坊門局は、隣室で眠る妹をゆすり起こし「御所さまのお招き。女人は何事もこわごわしからず、ひとのままになるが良き事」と須臾の間に女の手得をささやかねばならなかつた。

妹の体温が残る臥床に身を横たえ、聞きたくもない隣室の気配をうかがっていると、院の淫らな笑い声と童女の悲しげな泣き声とがこもこも流れてくるのであつた。

それから数日後、妹は正式に西ノ方として禁裡へ召し出された。中宮、女御の列へ加えられたのである。

「……それはそれで世のならい。ましてわが坊門家とし

ても二人目の女御を出したわけでございますから、家門の名誉と申すべきでございます。ただ口惜しいのは、あれ以後、御所さまが西ノ方を愛寵なされるとき、しばしば仁和寺へ泊りにくるのです。必ず妾を隣室に侍らせてお二人は……御所さまは殿御でございます。そのようなお仕打ちも興趣を増すかと理解できるのですが、不可解なのは西ノ方でございます」

近ごろでは閨房の戯れごとで、いつも姉坊門局のことを口にするという。つまり姉はどのような愛され方をしたか、また院をもてなしたのか。露骨に訊くのである。「懐ひとえだけの隔たりでございます。万事が簡拔けになります。しかも院は、妾に必ず隣室で寝ねよとお命じになるのです。西ノ方は日々女人ぶりの豊かになったとは言え、未だ十二歳の童女でございます。そのはしたなさは白拍子や遊び女とてかくまでは、と思われるばかり。聞こえよがしの口説を、じっと聞いていなければならぬ妾……これが地獄、魔界の沙汰でなくて何でござりましょうか。いっそひと思いに西ノ方を刺し殺そうかと妄念にとらわれたことも幾夜ありました。こんなにまでして、なお耐えて、生きてゆかねばならぬのでし

うか」

坊門局の訴えは切々と肺腑をえぐり、暗い弥勒堂をそのまま魔界と化せしめたかのようにみえた。暗黒の底に唯一人、半跏のポーズで坐りまします思惟菩薩は、そのたおやかな全身で女人の「苦」を背負っていたのであるうか。

安楽房はもの静かな、透明な声音で語りだした。

「むかし、亡き祖父の中原師元から、このような話を聞かされたことがあります。平相国清盛がなお健在だったころ、姉妹で寵愛をうけた美女がおりました。妓王、妓女と呼ばれ、平相国は他のいっさいの女人を近づけず、この姉妹を溺愛したものです。そんなさなか仏御前と呼ばれる白拍子が、西八条の屋敷を訪ねてきました」

清盛に招かれたわけではなかったが、時の権力者の前で得意の舞いをひとさし舞うことが白拍子の「願い」でもあった。だが清盛はさしでがましい行為として仏御前に会おうとしなかった。それを取りなしたのが妓王である。白拍子がおのれの芸を披露したいのはごく自然なこととござりましよう、と。

可愛いお前がそれほど言うのなら、と清盛は仏御前を

許し、酒座をもうけて彼女の舞いを見物することにした。十六歳の仏御前は妙なる美声で「今様」を歌いながら舞った。清盛は陶然と見惚れてしまった。舞いが終ると、身近く招いて仏御前に酌をさせ、やがて酔いがまわると清盛はそのまま仏御前の手をとらえて「帳台」の内へ消えてしまったのである。

すでにこの瞬間から妓王、妓女の立場は失われていた。仏御前を夜ごと抱く清盛は姉妹をうとんじ、ある夜の酒座でついに言った。「お前らは未だこの屋敷でうろついておったのか。一刻も早く消えて失せろ！」仏御前がいろいろと取りなしたが、もはや聞く耳を持たなかった。

かくて姉妹は嵯峨の一隅に柴の庵を結び、

「……永年信じ申してきた阿弥陀仏の本願をたのみ、心からなる念仏を日夜唱え続けていたのです。山里の一隅から洩れるお念仏の声も、阿弥陀仏がお耳を傾けて、わが名を呼ぶ者はいないか、と探がし求めて下さるお慈悲がある以上は、必ずいつかお聞き届け頂くはず、と念仏生活に励んだのです。そんな春秋が幾たびかめぐり去ったある宵のことでした。竹の編戸を叩く音がします。妓

王が立ちいでて手燭をかざすと、そこに仏御前の尼姿を見たのです。仏御前は涙ながらに語ったものです」

権力者平相国清盛の心変りは迅速である。仏御前を溺愛したのも二年そこそこ、たちまち飽きて別の女性へ氣持を移してしまった。西八条の屋敷を去った仏御前は世をはかなくて「身投げ」を考える。河洲や断崖をさまよっているうちに、ふと自分と同じ運命に見舞われた妓王、妓女の姉妹が現在どうしているかに思い至る。その消息を求めたら嵯峨野に隠棲していることを知った。

「かくて三人は心をひとつにして以後は念仏三昧。また不幸の人々がいると聞けば進んで出かけて行って念仏の功德を説き聞かせました。三人とも阿弥陀さまのお迎えは早く、若くしてお浄土へ旅立ちましたが、後白河法皇の長講堂過去帳にもはつきりと「妓王、妓女、仏が尊靈」と書きのこされてあります。ご母公さまもこの際、外界のわずらわしいことにまどわされず、法親王さまともども仏法にご専念なさるのが第一かと存じます」

安楽房は慎重に言葉をつないだ。あまり人間的な生々しい話題にふれることは適切でない。それと、坊門局が傾けてくるひたむきな感情の波を、少しでもやわらげた

かった。

妓王姉妹と仏御前の物語は、のちにいささか潤色されて「平家物語」に採用されている。生仏の琵琶によって語り伝えられたと思われる。後白河の長講堂過去帳は法皇の「年忌」にあたって安楽房らの手で編されたもので、充分にこれが裏付けられるであろう。

三

安楽房がつとめて避けようとしても、話の流れは人間臭さい汚泥水域に停滞してしまう。坊門局はそれを望んでいるようであった。

「西ノ方が正式に中宮となって入内なさるにあたり、それはついこの正月のことでした。奇妙な事実が介在しているのです。西ノ方は坊門家の娘として入内したのでありますね」

「はほう。誰方かの養女にでもなって……」

安楽房も嫌いな話題ではなかった。思わず高屏風へ向って膝を乗り出させていた。

「養母となった方は卿典侍までございました」

「卿典侍……」

のちに二位へ昇格した卿二位兼子その人だ。かつては後鳥羽院の乳母であり、五十の声を聞いて大納言頼実と再婚、現在政治の中樞に坐りこむ影の権力者だった。

「しかし、なぜ卿典侍が年端もいかぬ西ノ方を無理矢理に中宮として押し上げたのでしょうか」

「妾が思いまするに院の御寵愛が妾から薄れ、院と坊門家との仲が疎遠になりがちでございます。卿典侍はこの糸を結び直す意味もこめて、合わせてご自身の立場を院に対して強固になさろうとしたのでしょうか」

と、坊門局は分析する。

「ねらいは坊門家の財力ですか」

「たしかに坊門家は九条家と並んで大荘園の保有者であった。

「財産もでしょうが、当面は鎌倉調伏への足場固めでございましょう」

鎌倉将軍実朝の御台所は坊門家の娘だった。実朝夫人を擁していれば、執権の北条氏も後鳥羽院政へ向って軽々しく動き出せぬであろう。政治の流れ一つで、源家と北条氏との分断も可能になる。鎌倉調伏を施政の根本とする後鳥羽院政だ。絶対のキメ手となるはずだった。

卿典侍兼子はそこまで読みこんでいたようである。

ところで後の話になるが、坊門局の妹西ノ方はやがて後鳥羽院との間で二児をもうける。長仁、頼仁という皇子である。兼子はその頼仁——すぐる御前をわが手もとへ引き取って育てあげる。承久ノ変直前、上洛した北条政子と密談した兼子は、このすぐる御前を将軍実朝の嗣子として送りこもうと画策する。後鳥羽院の胤（たね）が鎌倉将軍となれば、文字どおり公武合体が成立するわけで、邦家にとってこれほど目出たい話はあるまい。

これが兼子の論理であった。邦家にとってではなく、じつは卿二位兼子の権力固ためのうえで最高の妙手だったと言えるであろう。

——如何ニ将来、コノ日本国ヲ二ツニ分ケル事ヲバ仕置カンゾ。

さすがに後鳥羽院は東西の両女怪が策したこの案をしりぞける。兼子の野望は挫折を余儀なくされた。もっとも西の女怪兼子は大いに情熱をこの縁組にかき立てたが、東の北条政子がどこまで気を入れて密談に耳を傾けたか疑問である。彼女は兼子が設営した後鳥羽院との拝謁を冷然と忌避し、

——辺鄙ノ老尼、竜顔ニ咫尺スルコト、ソノ益ナシ

〔吾妻鏡〕

として、さっさと鎌倉へ帰ってしまったのである。

「姉妹のお話ばかりになりましたが……」

と安楽房はそこで坊門局に松虫、鈴虫姉妹の経緯を聞きただす端緒を掴んだ。彼女たちを剃髪させた者は誰か。

坊門局はきっぱりと答えた。

「尊長僧都でございます。妾も法親王もそのお剃度には立会いました」

「仁和寺で？」

「はい。未だこれからという女人の黒髪を根元からぶつとりとお切りになつて」

まさしく未だこれからの松虫、鈴虫だった。年若い土御門帝から懸想されたとは言え、特定の異性にもめぐり遇つてはいない姉妹である。

「やはり異だったか」

「異……とおっしゃいますと」

「いや、あの剃髪を尊長僧都たちは東山の法然ご房がおやりになったと言ひふらししているからです」

「法然さまが？ さよう、尊長僧都のほか、あの恐ろしい那智ノ檢校も同座なさつていらつしやいました」

筋書はこれで完全に読めてくる。かねて危惧したわが師法然をおとし入れるための捏造であることは、もはや疑ぐる余地もない。法然は、土御門帝の愛人だった未通の姉妹を勝手に落飾させた。これは公儀への明らかな反逆ではないか。

「いま恐ろしいとおっしゃつた那智ノ檢校とは、あの長敵僧都のことですか」

安楽房は聞きとがめた。名前だけは耳にはさんでいたが、未だ実物にふれたことがない。

「そうです」

「どのように恐ろしいのですか。何か危害でも？」

「危害を加えられたことはございません。ただ、しよつちゅう仁和寺の御所へ出入りして恐ろしい眼つきで妾をじろじろ眺めまわしております」

「おぬし、知っているか」

と生仏へ問いただした。

「昨夜、殺氣をふくんだ尾長鳥の話を申上げましたね」

「うむ」

「一度この境内で立ち話をしたことがございます。那智ノ杵校からはあの鳥と同じ殺氣が……」

「どうやら『後夜』の念仏をつとめる刻限が迫っていた。懺法は打ち切ることにした。」

「安楽さま」

坊門局は言葉をあためて問いかけてくる。

「何でしょうか」

「このたびの参籠ですが、幾日幾夜つとめたらよろしいのでしょうか」

「通例なら三日三夜、長くて七日でしょう」

「それはわかっておりますが、妾……」

何か言いよんでいる様子だ。

「特別なご祈願でもございますか」

「あの妾、専修念仏にのっとった参籠をつとめたいと存じます」

「専修念仏の参籠ですか」

常住坐臥、勤勞にいそしみながらも唱え続けるのが専修念仏であって、自力門のような修法参籠は『雜行』となってしまう。

「妾は安楽さま、あなたのお弟子になったつもりでござ

います。あなたがお命じになる方式だけで、この参籠をつとめたいと心にきめてまいりました」

「……」

「急に思い立ったわけではございませんね。かなり以前から今度安楽さまにお会いした折にはこの点をお願いしうと」

もはや宗教心をこえた恋の告白とは言えないだろうか。

「……」

安楽房は屏風の向う側にいる女体を思いえがかずにはおれなかった。全霊全身を傾けていま安楽房へすり寄って来ようとする坊門局だった。

お互いの吐息が白い尾を引いて屏風の面で内外からもつれ合った。長い洗滌があった。

しかし安楽房は、やがて決然と言い放った。

「それならば十日十夜おつとめなさるがよろしい」

(つづく)

新年賀謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―二二四一代表	学長 長谷川良昭 淑徳短期大学 〒174 東京都板橋区前野町五―三―七	学長 大橋俊有 京都文教短期大学 〒611 宇治市模島町八〇
埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校長 里見達人 〒174 東京都板橋区前野町五―一四―一	鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規	学校法人 芝学園 理事長 豊岡益人 学校長 徳久鐵郎
東山学園長 石井俊恭 京都市左京区永観堂町五一	東海高等学校長 滝俊立 〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	光心寺住職 北山良祐 〒425 焼津市東小川一―六―一	祐天寺 巖谷勝雄

謹賀新年

無量山 伝通院	九品寺住職 漆間 純成 〒530 大阪市北区同心二―四―八	回向院 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	九品仏浄真寺 清水 順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 神奈川県仏教会副会長 柴田 敏夫	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区南青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―一二 電話(〇四四)二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸 寺 原口 徳正	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六―四 仏教福祉センターによるひる銀行	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺 楠美 知行	光運寺 飯田 信弘 〒510 四日市市中部三―一二―

新年賀謹

廣隆寺住職

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

浄土宗議會議員

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二一五一

お骨仏の寺 一心寺

高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五
電話(〇六)七七一一〇三七二(代)

知恩院布教師会九州支部長

聖徳寺住職

金子貫達

〒850 長崎市銭座町四一五九

浄土宗議會議員

光明寺住職

山口諦存

〒673 明石市鍛冶屋町五二二〇

新善光寺住職

太田隆賢

札幌市中央区南六条西一丁目

浄土宗新潟教区長
照專寺住職

川端大祐

〒947 小千谷市寺町二八五一

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二一三一一八

遍照寺住職

宇佐美諦練

〒461 名古屋市中区泉二一九一三三

仏生山法然寺

細井俊明

細井照道

謹賀新年

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部 仙順

電話(〇三)八一―一三三七

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

群馬教区長

野口 善雄

〒376 桐生市本町六一―三九八 浄運寺

西住院

戸川 靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤 弘道

〒328 栃木市万町二―一四

電話(〇二八二)二一〇八〇二

芳泉寺

なぎ 柳 楽 真純
しん じゅん

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗教学局長

法然上人降誕慶讃事務局長

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

金田 明進

〒302 取手市白山二―九―二八

弘経寺

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 正月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年十二月二十五日 印刷

昭和五十七年 一月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒113 振替東京八八二一八七番

謹賀新年

浄土宗宗務庁

〒605 京都市東山区林下町四〇〇

浄土宗東京事務所

〒105 東京都港区芝公園四―七―四

大本山 増上寺

法主 藤井実応

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従軍道路大阪より二時間

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

〒243 鎌倉市長谷四―二―二八

稲田稔界